特25
920

閲生先郎一舜間久佐
序生先隆正山池
跋君雲桐上井

東洋歴史問答

德重鴻城編

20
113

東洋歴史問答目次

東洋史總論
唐虞夏殷の時代
周の時代
春秋戰國の時代
太古の印度と其宗教
秦の時代
前漢及び後漢時代
三國の時代
西晉東晉及び南北朝時代
隋唐の時代
五季の時代
宋及び蒙古の時代
元及び明時代
清の時代

（目次終）

序

方今百科の學、駸々として長足の進歩をなし、千古の遠きより、未來の幽に至るまで、研究に研究を重ね、稽査に稽査を積みたり、これ十九世紀文明の賜にして、吾人の最快哉を歡呼する所なり。然れども、見よ、中學の課程を、歴史あり、地理あり、國語及漢文あり、博物あり、數學あり、其數殆ど二十に達せんとするにあらずや、これを、青年の腦裡に注入し、艶麗なる美花を開かしめ、偉大なる果實を結ばしめ、國家百年の盛衰を其双肩に擔はしめむと欲せば、なるべく、簡明にして絶大なる功果を修むべき手段をこらざるべからず、德重鴻城生、東洋史の教授をうけしより、苦辛慘憺、後輩を利せんとし、餘暇を以て、この書を編述し、歴史に造詣深き、佐久間君の嚴密なる校閲を經たり、其簡にして、暗記に便なるは、本書の特色なるべし、然れども、物には一得一失あり、問答書の弊は、事件と事件との聯絡を阻絶するにあり、故に、この書にのみよらんか、所謂、問答學者となり終らんのみ、

されば、これを完全なる教科書と比較して、研究せば、其功果の、必ず、大なるを確信するものなり。

諸子、彼の隣邦、支那の現狀を見よ、彼は、盆栽の花か、四邊の狀況、暖室の工合により、これを偉大にするも、これを矮小にするも、或は、蜿蜒卑く低れ、高く揚らしむるも、一に、植木家の勝手隨意なり、この植木家たるべきものは、我有爲の青年を措きて、他に求むべからざるなり、起て、青年諸士、東洋史を研究して、隣國の眠を醒せ、四百餘州の山河廢れて、草木は黛風の下に伏せんとす、東洋の形勢、累卵も啻ならず、然るに淸人これをみて恠まず、嗚呼、この好機に際して、この書いづ、韓昌黎、言はずや、沿河而下苟不止雖有遲速必至於海と、天下幾千の青年、其嘉惠により、迷津覆沒の患を免れ、龍と化し、風と變ずるもの、鮮少にあらざるべし、欣喜のあまり、蕪言をのべて、卷首にそふ。

明治三拾六年七月時鳥血に泣く夕　池山正隆

緒言

誰か好んで一時の小名譽心に驅られ編書を公にする者ぞ、余に於ても亦然り本書を編したる蓋し過去に於て東洋歷史の研究に苦められ幾多の腦漿を費やせしも比較的其効果少なく且は現に研究中の學生諸君に於ても亦大に苦しまれつゝあるを知るが故也、要するに東洋史の復雜紛錯せる所以か、さりとて東亞の風雲急なるに際しては此研究を放棄すべくもあらず、凡そ人事興亡の起源を探るにも攻爭鬪伐の結果を知るにも必ずや多册大編を讀まざれば得難しと云ふ定義は未だ存せず、飜て今日迄に公にせられたる問答書類の大部を觀よ、見るに便なる如くして暗記に便ならず是れ其行文の冗長にして事實の不調和なる所以、本書は殊に其弊習を一掃し最も暗記に便利に最も受驗用に

適切に史の粹を集め其精を拔けり然れども短日月の編纂に係るを以て恐らくは記事の錯誤と文字の魯魚とを免れざるべし讀者幸に指摘の勞を吝む勿れ。

明治三十六年六月

德重鴻城識

東洋歷史問答

東洋史總論

東洋史とは何ぞや

東洋史とは中央亞細亞以東卽ち支那本部、蒙古、西藏、印度、波斯、朝鮮及び西伯利亞等其範圍內に於ける種族の興亡及び邦國の盛衰等凡て東洋人類社會に至大の影響を及ぼし以て今日に至れる過去の事實を記錄せるものにして西洋史と相並び世界歷史の一半を構成す。

東洋に於ける國民發生の地域を問ふ

亞細亞大陸に四大肥地あり皆嘗て古代國民の發生せる地域なり第一は太平洋面の水域にして卽ち黃河の灌流する地域實に是れ東洋文明の發生地なり第二は印度洋の水域にして恒河、印度の二川灌流する地域實に是れ上古印度文明の發生地なり第三はアラル海の水域にしてヤツサルテス、オツサスの二川灌流する地域所謂支那史に於ける西域諸國の興亡せる處なり第四は波斯灣の水域にしてチグリス、ユーフラテスの二川灌流する地域實に是れカルデア、アツシリア、バ

ヒロニア等の發生地なり。

東洋史に關せる人種の類別は如何

東洋史中に包括すべき人種の類別は支那人種、西伯利亞人種を主とし支那人種を分ちて漢族、圖伯特族、交趾支那族となし漢族は支那本部に住し圖伯特族はカシユミール、チベール、ブータンの地に住し交趾支那族は雲南、貴州、後印度の地に住したるものなり又西伯利亞人種を分ちて日本族、通古斯族、蒙古族、土耳古族となし日本族は日本の地に住し通古斯族は朝鮮の北部及び滿州の地に住し蒙古族は印度モーガル帝國、內外蒙古及び天山北路の地に住し土耳古族は天山南路及中央亞細亞の地に住せしものなるべし

東洋史と支那との關係は如何

東洋史は頗る複雜なるが故に各種の事實を網羅し是を詳述せんには到底小冊子の許す所に非らざれば凡そ東洋史を學ぶ者制度の變遷邦國の興亡民族の盛衰等支那を東洋史の中心と定め其事實を主とし自餘を客として討究し可成的繁雜をさくるの方法を考へざる可らず卽ち東洋史に於ける支那は史の中樞たる關係をもつもの也

東洋史の太古は如何

漢人種の始めて國を黃河の沿岸に立つるや南蠻は其南にありて支那本部の大半を有し東夷は淮水の下流より山東省の東部に據り北狄は山西省に入り西戎は渭水の兩岸に迫れり是れ支那の太古三皇時代の形勢なり又印度にありては西紀前大凡二千年頃に當りてアリア人種は裏海の東南より來りてパンヂヤブ地方に侵入し先づ印度河とヂヤムナ河との間を占領して根據地となしドヅトと云へる以前石器時代の人民を驅逐して印度河及びカンガ河の水城に繁殖せる民族を征服し西紀前千年頃始めてカンガ河に達せり是れ東洋太古史の主要なるもの也。

唐虞夏殷の時代

帝堯陶唐氏の治政を問ふ

堯は帝嚳の子にして平陽に都し羲氏和氏に命じて曆法を制定し三百六十六日を以て一年と定め閏月を置きて四時を正し治平凡九十餘年舜を畎畝の中に擧げて是に位を讓れり。

帝舜有虞氏の治政は如何

堯歿して舜蒲坂に即位し都を定む舜は五歳に天子一巡諸侯四朝覲の制を立て禹をして洪水を治めしめ五教を布き五刑を定め大に不逞の諸侯を征服し九官の制を立つ是に於て紀綱大に張り四民帝德に沐浴す後世仰ぎて無上の聖世となし堯舜と并び稱す。

夏后氏禹の功績は如何

堯舜の世洪水氾濫せり禹舜の命を受け水土を治むる事八年道路を通じ水運を開き九州を畫し田を分ちて上の上より下の下に至る九等となし田の上下と土地の遠近とに由りて貢賦の差等を定む漸くにして一統政治の基礎を固め節儉を主とし政治に勵み人民を休養せしかば天下其功績を仰がざる者はなかりき。

殷の興廢を擧げよ

夏后氏の末王桀暴虐なりければ天下不快にたへず帝舜の司徒契の後なる殷の湯王を奉じて是を滅す時に我紀元前一千百二十四年なりき已にして殷王成湯は商より起り夏后氏に代りて政を爲し能く賢臣伊尹を用ひて天下を悅服せしむ其後太甲、太戊、祖乙、盤庚、武丁等の名君ありて數々王室の衰勢を挽回せしが王紂に至り暴戾放肆にして賦斂を重くし刑辟を酷にし臣下の諫を聽かず大に民心を失ひ遂に周の武王に滅ぼさる實に我紀元前四百六拾二年の時なりき。

周の時代

周の興起に就て重大なる源因を擧げよ

周の起りは遠く父祖（季歴昌）の時にあり殷紂暴政の世に當りて文王（昌）、大に仁政を行ひ諸侯の殷を去て周に歸する者天下三分の二武王英武を以て是に繼ぎ人和と地理とを利用し一擧して殷を亡したるなり。

伯夷叔齊の事績を擧げよ

周の武王紂を伐たんとし西伯の木主を載せて以て行けり伯夷叔齊馬を叩て諫めて曰く父死して葬らず爰に干戈に及ぶ孝と云ふべけんや臣を以て君を弑す仁と云ふべけんやと左右是を兵せんとす武王の曰く義士也と扶けて是を去らしむ王紂を牧野に討ち既にして天下を一統するに及んで伯夷叔齊周の粟を食ふを耻とし河中府河東縣の南なる首陽山に隱れて世を終れりと云ふ世に義士を以て稱せらる。

周公旦の事業を記せ

武王崩して成王立ち歳尚幼なかりしかば七年の間叔父周公之が攝政となり洛邑に東都を營み王の常居を西都卽ち鎬京（後の長安）となし諸侯を東都に會せしむるの制を立てたり其他成王の時周の文物制度の規模充分に確定せるは蓋し周公の力與かりて大なりと云ふべし又管蔡の亂を平げて王室の藩屏を堅ふしたる等其功業の偉大なるを知るべし。

周の稅法は如何

夏の貢法と殷の助法とを並用せる徹法にして一夫に田百畝を授け鄉邑に貢法を用ひ都鄙に助法を用ゆ其割合十分の一に當れり。

周の制度は如何

純然たる封建制度にて諸侯に公侯伯子男の五爵あり公侯の封土は方百里（大國）伯は方七十里（中國）子男は方五十里（小國）天子は甸服方千里を有し是を王畿と稱す。

周の官制は如何

大冢宰ありて天下の行政を總べ大司徒は農商、敎育、警察を司り大宗伯は祭祀朝聘を司り大司馬は軍事を管し大司寇は刑辟を糾し大司空は百工の事を治む又別に三公三孤の職を置き天子輔弼の任に當らしむ然れ共常置の官に非ず且政務に與からず。

周の兵制は如何

徵兵は廿歳より六十歳迄とし半歳若くは一年を以て更替せり、軍隊は一軍を一萬二千五百人とし是を師、旅、卒、兩、伍に分つ而して天子は六軍大國は三軍中國は二軍小國は一軍を置く。

周東遷の理由を問ふ

周室は一時泰平無事の有樣なりしが昭王、穆王の時より漸く振はず厲王に至り楚人僭して王と稱し宣王一旦中興の偉業を立てしも其子幽王は婦人の色に惑ひて犬戎の殺す處となり平王遂に犬戎の害を避けて東都洛邑を常居となすに至れり是を周東遷の理由となす。

春秋戰國の時代

春秋時代とは何か

平王の都を洛邑に東遷せし以來周室愈衰微し號令下に行はれず戎狄内に侵入し諸侯各地に割據

す諸侯の大なるもの魯、衛、晉、鄭、吳、燕、曹、蔡、陳、齊、宋、楚、越、秦の十四國あり是等諸國何れも呑噬の慾を恣にし其最強大なるもの交々起りて覇を稱し天子を挾みて諸侯に號令す孔子出でゝ春秋を作り平王の末年より敬王の末年に至る間の治亂を明にせり故に此時代を稱して春秋の世と云ふ。

五覇とは何ぞ及び其心事は如何

五覇とは齊の桓公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊王、宋の襄公の五人を云ふ是等の人々は周室の萎靡振はざるに乘じ名を尊王に假り國土の廣く兵力の強きを恃み他の諸侯を抑壓し以て其私を營める者なり故に表面より云へば稱すべくも裏面より云へば其心事眞に惡む可きものあり。

齊の桓公の覇業を問ふ

齊の桓公は太公望呂尙の後なり齊國の內亂を平げ管仲を用ゐて兵制を更め稅法を定め國力の富强を致し諸侯を會して山戎北狄を討じ又楚の成王の周室に貢せざるを討ち或は周の襄王の爲に叔帶の亂を定め遂に所謂諸侯を九合し天下を一匡するの覇業を成せり。

管仲の經綸を記せ

管仲桓公を助けて天下を經綸せし事業の偉大なる又見る可きものあり其國內を治めて國力の富强を謀り且つ齊は海岸に瀕する國なるが故魚鹽の稅を收めしめ又鉄の稅を取りて國帑を富ませ周公の意を襲ひて兵制を改革し兵を農に寓する組織をなして兵力を强壯にし諸侯を匡さむとし北杏に會して宋の亂を平げ柯の會をなして魯の侵地を返し遂に諸侯の信を受くるに至れり蓋し桓公の覇業も管仲の經綸に由るもの也。

吳越興亡の狀態を記せ

吳は古公亶父の長子太伯の後なり今の兩江の大半を占め平江に都せり王壽夢の時始て晉に通じてより國力漸く强く闔閭立つに及び楚の亡臣伍子胥を用ゐ大に楚を破れり時に秦兵を出して楚を扶け越は新たに勃興して南方より吳を侵したりし故吳軍兵を治めて國に歸り越王勾踐と携李に戰ひて闔閭傷き死せり闔閭の子夫差臥薪嘗膽の苦を甘んじて恢復を計り遂に越王勾踐を會稽山に圍みしも伍子胥の諫めを納れずして是に和を許し次で齊の內亂あるに乘じ之を破り諸侯を黃池に會して覇を稱し意氣漸く驕れり是より先勾踐は會稽の恥を雪がんと范蠡の謀を用ゐ密かに回復の機をまちしが是に至り機熟せりとなし師を興して吳を討じ我が紀元百八十八年遂に夫

差を姑蘇山に自殺せしめ吳を滅ぼして浙江、江蘇の地を兼有し北進して齊晉諸侯を徐州に會し貢を周に致し伯となり以て一時江淮の間に雄視せしが勾踐の歿後國勢復た振はざりき。

范蠡の事歴は如何

范蠡は楚の人なり越王勾踐に事へて上將軍となり勾踐を佐けて吳を滅し以て會稽の恥を雪がしめ功成り名遂げしとて任を致して越を去れり去るに臨み太夫種に書を遺りて曰く越王の人となり長頸鳥喙なり倶に患難をすべきも倶に安樂を同ふすべからず子何ぞ去らざると種疾と稱して朝せず或人種を譖して曰く且さに亂を作さんとすと劒を賜はりて死せり范蠡是に於て其輕寶珠玉を裝ひ私從と舟を江湖に浮べ齊に出で姓名を變じて鴟夷子皮と云ひ父子産を治め數十萬に至れり齊人其賢を聞き以て相となせり蠡喟然と嘆じて曰く家に居ては千金を致し官に居ては卿相を致す此れ布衣の極なり久しく尊名を受くるは不祥なりと乃ち相の印を歸し盡く其財を散じ重寶を懷にして間行し陶に至りて止まり自ら陶朱公と云ひ貲巨萬を累ねたり魯人猗頓往て其術を問ふ蠡曰く五牸を畜へよと乃ち大に牛羊を猗氏に畜ふ十年の間畜蕃殖して貲王公に擬せり故に天下の富を云ふもの陶朱猗頓を稱せり。

戰國とは何ぞや

春秋の末に至り文武周公の禮樂刑政は既に蕩然として地を掃ひ攻伐鬪爭日に相尋きて詐力權謀公行して憚るなく仁義の假面を脱して弱肉强食周室は微々として無きに同しく諸侯中最も强國たりしは秦、楚、趙、魏、韓、齊、燕の七國にして是等の國が各私を逞ふせんがため周の威烈王より秦が天下を一統する迄攻伐鬪爭を事とせり此時代を戰國と云ふ。

商鞅の施政計畫と其結果を問ふ

秦の孝公英明なり立つに及んで令を國内に下し賢者を求むる事頗る急なり時に商鞅は衛にありしが招きに應じ璧人景監に因かて以て孝公に見へ說くに帝道王道を以てし三變して霸道となり然る後强國の術に及ぶと公大に其說を悅ひしと云ふ鞅は管仲の政治とは其趣きを異にし農を以て國富の源とし井田を廢し阡陌を開きて地力を盡すの計をなし民力に任せて農耕を勵ましめ多く粟帛を致す者は其力役を免す又秦の地の廣くして人口少なきを以て戶數を增さんがため二男以上ある者は分家せしめ背くものは其賦を倍し且つ移住開墾をも計れり又法を以て國を治むるを必要とし人民をして什伍をなさしめ軍功あるものには官爵を授け私鬪をなす者は刑を加へ姦

を告げざるものは腰斬す姦を告ぐる者は敵を斬ると賞を同ふし姦を匿くす者は敵に降ると罰を同ふしたりかくて十年を經て國内大に治まり富强を致せり孝公の子惠王立つに及び商鞅は殺されしと雖秦の富强は實に其施政計畫の功に歸せざる可らず。

蘇秦合從策の結果は如何

蘇秦秦の獨り强くして六國の弊に乘ちんとするを憂ひ燕趙并に他の四國に說きすでに六國合從の策なり遂に是を同盟せしめ身六國の相印を帶びしかども秦は直ちに離間の策を講じ齊魏を撓きて是を壞れるのみならず六國も互に相猜疑して團結を固くする能はず又齊の湣王は其强を恃みて燕を破る等結果其効なく僅か一年にして合從策破れたり。

張儀の連衡策を記せ

張儀は魏人也蘇秦の合從を成せる時秦に入りて客たりしが合從策の破れたる後六國をして連衡し秦に仕へしめんと欲し先づ魏に至り相となつて魏王に說き次に謀を以て楚王を屈し韓王に說き齊王を諭し轉で趙と燕とを誘ふて遂に連衡策を全ふせり時は蘇秦が合從策をなせしより二拾二年東周赧王の四年なりき。

田單と樂毅の事を記せ

樂毅は能く兵を用ゆるを以て東周赧王の三十一年燕の昭王の命を奉し齊を討つの機に際しぬ彼齊に入るや王出奔す樂毅勝に乘じて六ヶ月にして齊の七十餘城を降す此時に當り齊の臣王孫賈なる者湣王の子法章を擧して主となし營を保て燕に抗し卽墨の人田單を推して主將となし以て燕軍を拒がしむ田單武略あり自ら版鍤を操りて士卒と苦樂を同ふし妻妾は行伍に編し是に於て反間を放ち樂毅を燕より退かしめ遂に火牛の奇策を用ゐて大に燕軍を擊破し七十餘城を恢復す世に是を燕齊の報復と云ふ。

戰國時代の重なる人物を擧げよ

戰國時代門下に食客多かりしは齊の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君等にて是を戰國の四君と稱す其他辯舌を以て名を著せし者には蘇秦、張儀あり兵法を以て聞へし者には孫武、吳起、司馬穰苴あり又法律刑名家には商鞅、韓非あり將帥には廉頗、藺相如、樂毅、田單等あり是を重なる人物となす。

西周より戰國末迄の學者と其說を述べよ

儒家には孔子、孟子、荀子等あり孔子は大に仁道を説き孟子荀子は是を祖述し孟子は性善を唱へ荀子は性惡を唱へ各其學説を恢弘せむ事をつとめたり又道家の老子は無爲恬澹を主として説を吐き禮法に拘泥するの不可を論ず莊子、列子は皆老子の亜流なり其他楊子出でゝ利己主義を説き墨子出でゝ兼愛説を唱へ法家の管子は出でゝ實利主義を説けり。

戰國時代學術の進歩せし理由を問ふ

春秋戰國の時代には周の制度禮法等敗壞し上下の階級區別なく從て思想の束縛なく言論の自由ありしかば志ある者身を立つるに容易なりし時世とて理を究め道を講ずる者多く起りたれば學術の進歩も是に伴へるなるべし

太古の印度と其宗教

太古印度の狀態は如何

史傳明かならずと雖も今より數千年前の古に於てアリアン人種の一部此の地方に南下し土族と戰鬪して數多の部落を作り爾來人口の増加と戰鬪服屬の結果各部落共四級の民に分かるゝに至

れり。

印度の四階級とは如何

第一は僧侶たるブラーミン第二は軍務、民政を掌りしシヤトリア第三は商農を以て身を終るべきヴェーシヤ第四は工或は勞役を以て身を終るスードラなり是を印度の四階級と云ふ。

波羅門教と佛教の教義如何を述べよ

波羅門教にありては種族の如何によりて死後神になるゝ者と然らざる者との差別あれど佛教にありては如何なる種族を問はず死後は成佛すべきの平等主義を唱へ無差別を説けり。

阿輸迦王布教の結果は如何

阿輸迦王は毛利耶朝を建てしグプタの孫にして位は天下人臣を極めしかども身スードラなるを以て種族に依り成神と否との差別ある波羅門教を快とせず遂に極力佛教を奬勵保護なしたり其一般は第三回の結集をパータリプトラに行ひ佛教の主義を確定し法令を以て其主義を國民に告げ又佛徒を四方に派出して西は大夏より南は「シムハ」に至る迄其感化を與へたり又室利房をして秦に布教せんとせしが始皇帝是を捕へて獄に下し遂に殺しぬ阿輸迦王は我紀元四百四十年

に死せり。

秦の時代

秦一統の源因を記せ

第一は孝公の善政民力を休養せし事第二は根據地を陝西省と定めたるを以て戰守に利にして中原を統一するに便なりし事第三は商鞅、伯起、王翦の如き法家名將を招き大に人材の登用をなせし事第四は商鞅の建策孝公の改革が大に秦を富强に至らしめたる事第五は張儀の連衡說及び范雎の遠交近攻策が能く秦効せし事是を秦一統の源因となす。

始皇帝の帝業を問ふ

第一封建制度を廢し縣郡の制度を設け中央集權の實を擧げし事第二周代より傳へ來れる道德的の官制を廢して純然たる政治的の官制を採用せし事第三民間の兵器を收めて鐘鐻金人となし又天下の富豪を國都咸陽に聚め諸國有志の財力と兵力とを奪ひし事第四尊嚴を天下に誇示して人民を壓服せんがため大に土木を起したる事第五學者當世を誹譏し人民を煽動せしかば詩書を燒き儒者を坑殺せし事第六萬里の長城を修築して支那北方の守備を嚴にせし事第七法度、衡石、車軌、文字を一にせし事。

趙高の事を記せよ

趙高嘗て始皇帝と南巡し帝途に病む則ち自ら起たざるを知り璽書を長子扶蘇に賜はむとす使未だ發せずして帝崩ず趙高は次子の胡亥と好し則ち李斯と謀りて璽書を改め扶蘇に死を賜ひて胡亥帝位に昇る然れども李斯丞相の位に在りて趙高權を專ちにするを得ざれば帝に諫して遂に是を咸陽の市に腰斬せしむ已にして天下の諸豪族皆秦の壓制暴虐を鳴らして各所に蜂起するに當り高奏して曰く彼等何ぞ能く爲す所あらんやと秦兵頻りに敗るゝに及び帝の怒らん事を恐れ遂に人をして帝を弑せしめ公子嬰を立つ嬰立つに及び趙高の奸を知りて是を族殺するに至れり。

項羽と劉邦の攻爭を述べよ

項羽既に懷王の約に背ひて自から立ちて西楚の霸王と號す劉邦怒つて兵を擧げ是と戰はんとせしが賢臣蕭何の諫を納れて國に就き蕭何を擧げて丞相となし韓信を大將とし張良を帷幕の臣として密に天下を圖れり已にして楚將の王たるを得ざるを憤り齊郡臨淄に叛するものあり項羽兵

を率ゐて是を征討せんと發せし劉邦は時機到れりと先づ關中を略して洛陽に入り遂に項羽の都彭城を陷れて是に據る項羽報を得て軍を旋へし彭城を復して大に劉邦の軍を破り逃ぐるを追ふて滎陽を圍めり此時に當り漢の大將韓信は西魏の各地を定め將さに東は齊を擊ち南は楚の糧道を絶たんとし九江、玉蹤布は楚に背き楚の老臣范增は項羽を去り劉邦は一旦滎陽を遁れて黄河を渡りしも亦還りて廣武山に軍せり次で項羽は兵量の乏しきを患ひ中國を二分し鴻溝以西を漢となし以東を楚となすを約す而して兵を罷め東歸せしが劉邦の追擊を被りて垓下に圍まれ遂に烏江に到りて自刎して死せり時に我が紀元四百五十九年なりき。

鴻門の會の結果は如何

項羽鴻門に陳し將に劉邦を伐たむとす項羽は勇武絶倫兵も亦多し邦其の與に爭ふ可ちざるを知り謀臣張良と項羽の叔父項伯に說きて救解せしめ自ら往て項羽に謝す是を鴻門の會と云ふ其結果項羽は謀臣范增の言を用ゐず遂に邦を免して其軍に返ちしめしかば懷王の約（初め楚の懷王諸將と約すらく先づ關に入りて秦を滅ぼしたる者關中に王たらんと）終に行はれず羽恣に邦を巴蜀に封じ漢王となすに至れり。

秦衰亡の源因を問ふ

1 儒生を坑殺し政讃論者を刑せし事

2 土木を盛に起せしを以て民奔命に勞れし事

3 稅歛を重くし刑罰を苛酷にせし事

4 治政道德によらずして重に刑法によりし事

垓下の役とは何ぞ

楚漢の攻爭數年にして項羽は助少なく食乏しく漢に敵し難きを以て天下を二分せん事を約し兵を治めて歸らんとせしが劉邦は張良、陳平等の勸めに從ひ約に背きて羽を追擊し是を垓下に圍む羽八百騎を從へ圍を脫し道を迷ふて大澤中に陷り追擊せられて東城に至る頃は僅かに二十八騎なりき是に於て謂て曰く我兵を起してより八年七十餘戰未だ嘗て敗を取らず今日此に及ぶは戰の罪にあらずして天我を亡すなり今日固より死を決せり願くば諸君の爲めに決戰し諸君をして是を知らしめんと皆其言實を全ふす是所に於て烏江に至り自頸す

范增、蕭何、張良、韓信、陳平の略歷を述べよ

范增は項羽の謀臣なりしが武勇あり七拾歳にして尚奇策を好めり次に蕭何、張良、韓信の三者は共に漢室創業の柱石と云へり則ち蕭何は政治家の名聲高く張良は謀略家の聞へあり韓信は將軍を以て名を得たり又陳平も漢の高祖に用ゐられし人にして謀略家の名高かりき。

前漢及び後漢時代

高祖の政策及び其得失を擧げよ

高祖大に順ふ處ありて周秦制度の折衷に心を用ひ封建郡縣の二制度を並用し郡縣は直轄地となし封建は同姓と異姓とを各地に交錯し國王となせしが異姓の者は間もなく叛を名として誅せられしかば國王（同姓）と郡守と各地に交錯せしめらるゝに至る而して高祖の末年には劉氏にして王たる者九國に及び能く漢室の藩屏たりと雖幾許もなく諸王の跋扈を來たすに至りしは失とする處なり。

呂氏の亂とは如何

故高祖の皇后呂氏子の惠帝死するに及び宮人の子を立てゝ自ら政をとり遂に呂氏の諸族を王となさんと欲し之を大臣に謀りしが王陵の外不可を云ふ者なかりしかば呂產を呂王となし呂祿を趙王となす既にして呂后崩ずるの後諸呂遂に劉氏に代らむとせしが劉氏と同姓なる齊楚の强兵外にありて能く是を制し內に陳平、周勃等の大臣あり巧に其間に處せしかば諸呂は少長となく誅に伏したりき。

孝文帝の治績を擧げよ

其政を執らるゝや專ら仁愛にして節儉なりき肉刑及三族を夷するの極刑を除き賑窮養老の令を定め四方の貢獻を止め庶民の田租を減じ又盲路を開きて官民をして充分に其意見を陳べしめ耕桑を勸め禮儀を具へて天下に遊手徒食の徒なからしむ又宮室園囿を增さず服御車騎の增加なく儉德を以て天下を率ひしかば吏民質樸海內殷富前後兩漢中に稀なる治平を致せり。

景帝が吳楚七國を打ちし所以を記せ

文帝の時に當り諸王の跋扈漸く甚しく朝命を重んぜず吳楚の如きは其威强大にして頗る制し難かりしが帝は其性寬仁にして事を生ずるを好まず暫く是を措きて民と與に休息せしかば彼等は益々其力を養へり景帝立つに及び晁錯の言に從ひ諸王の罪を責めて其地を削りしかば遂に所謂

呉楚七國の反亂あり故を以て景帝周亞夫の力に由り是を平定せり。

武帝の内治及び外征を述べよ

内治第一文學を盛にし教育を勸む董仲舒の勸めにて儒學を國學となす朝廷爲めに大學を立て五經博士を設く第二樂弘羊等を用ゐ皮幣白金を作り監鉄官を置き緡錢舟車に稅す第三推恩令を布き王侯の子弟を封するを許す外征第一は北伐なり衛青、霍去病等の諸將を用ひて匈奴を破り漠北に逐ふ甘肅省より天山南路に至る間屯田兵を配置す第二は東南部諸國平定なり南越、閩越、東越を亡ぼす第三は西南部諸國平定なり夜郎漢に屬し濮貢通す第四は古朝鮮平定なり當時の王右渠漢命に抗す卽ち武帝是を亡す。

漢と西域との交通せし起源及び結果は如何

漢と西域との交通せし起源は武帝が月氏に結びて共通の敵たる匈奴を滅せんとせし時にあり卽ち月氏が匈奴に逐はれ西域の大夏に入り是を滅して大月氏國を建てしより西域との交通は開けぬ然れども結果武帝は月氏との同盟を失ひたるを以て烏孫と同盟して匈奴を縮め又西域の數國を平定せり蓋し烏孫も西域にあるなり。

張騫、霍光の事蹟を述べよ

張騫は武帝が月氏と同盟して匈奴を擊たんとせし時西域に三度使せる人なり。

霍光漢の武帝に事へ禁闥に出入する事廿餘年出づれば則ち車を奉じ入れば則ち左右に侍し未だ曾て過失あらず人となり沈靜詳審出入殿門を下る毎に進止常處あり後武帝崩ずるに及び遺詔を受けて昭帝を輔け國政を攝行し民と休養し天下無事に百姓大ひに富めり。

蘇武の義節を述べよ

武帝蘇武をして匈奴に使ひせしむ單于是を降さんと欲すれども聽かず乃ち武を大窖中に置き飲食を絶ちて是を苦しむ武雪と羊毛とのみ食し死せざる事數日間に及べり匈奴以て神と爲し武を北海上無人の地に徙し牡羊を牧せしめて曰く牡羊乳せば歸さんと武野鼠を捕り草實を食し起臥漢節を放たず時に李陵降りて匈奴に在り衛律も亦降りて共に富貴なり交々武に降を勸むれども武肯せず留まる事十九年武帝の天漢元年を以て使し昭帝の始元六年漢單于と和するに及び歸る事を得たり强壯身を匈奴に致し歸るに及び髮鬚皆白かりしと云ふ。

漢と日本との關係を問ふ

武帝古朝鮮の右渠王を滅ぼすや朝鮮は漢の郡に歸せり當時朝鮮の南部は馬韓、辰韓、辰韓の三韓人是を占有し我國と往來せしかば是より我國人と支那との關係漸く開け九州地方の酋長中には漢より封爵印綬を受くる者あるに至れりと云ふ。

宣帝の外征を略記せよ

帝内治に勤めしと共に邊防を怠にせず我が紀元五百八十九年烏孫と同盟して匈奴を擊破す匈奴是より振はず又天山南路漢に屬し青海地方も亦降れり。

王莽の亂とは如何

元帝位に即くに及び弘恭、石顯等の宦者事を用ひ大に朝政を亂す成帝是を疾み外戚王風の力を假りて是を制す是より王氏の權强く平帝の時王莽大司馬となる僞德を飾りて人心を盛惑し以て漢室を奪ひ國號を新と稱すに至る實に我が紀元六百六十九年なり。

王莽敗亡の理由を記せ

王莽立つに及び井田法を復す民心騷ぎ立つ又漢の時行はれたる貨幣卯金刀を廢し周制に倣ひ大小二錢を鑄造す天下轉輸の煩に堪へず其他匈奴の王爵を削り侯爵を與ふ單于怒て反する等王莽敗亡の由て來る處なり

劉秀が王莽を滅せし以後の事蹟は如何

王莽漢室を奪ひしかば漢の宗室劉縯、劉秀の兄弟は更始皇帝劉玄を奉じて兵を舂陵に起し遂に王莽を滅せしが其後河北の地未だ平かず銅馬の諸賊は河濟の間に横行し其北には王郎と云ふ者成帝の子劉子輿と稱し兵を擧げて幽冀の地を略し勢頗る盛也是に於て帝劉玄は劉秀を遣はして河北の地を徇へしむ劉秀先づ王郎を斬り次て銅馬の諸賊を破り河北の地を定む是に於て劉秀の威名甚盛也劉玄秀を蕭王となし歸らしめんとす秀先に兄劉縯の殺されしを怨み且つ歸ちば禍を受けん事を知り河北の未だ平定せざるを口實として歸らず部下諸將の勸に從ひ窃に自立を計る當時赤眉の賊尚山東に勢を逞ふす劉秀北征の際に乘じ關中を取らんと欲し劉盆子を奉して帝となし西方長安を攻め遂に劉玄を降し諸將の勸めにより帝位に即き遂に洛陽に都せり是を東漢（後漢）光武帝となす時に我が紀元六百八十五年なりき。

光武帝施政の方針を問ふ

宦官、外戚、功臣等に政權を預らしめず又領地を與ふる事なく唯高位高官に任じ加ふるに月俸

を以てす。

昆陽の戰の大略を記せ

劉秀は昆陽、定陵、郾を徇へて皆是を降せり王莽是を聞き王邑、王尋をして兵に將たらしめ且虎豹犀象の屬を驅りて以て兵勢を助く總軍百餘萬旌旗千里絶へず秀の諸將顏色一變す秀是を勵まし敢死の士三千人を撰み是と其中堅を衝く尋邑の陣大に亂る漢兵銳に乘じて是を破り遂に尋を昆陽に殺す城中守るものも亦鼓譟して出で中外勢を合はせて攻擊す莽の兵大敗す會々大風雨あり虎豹洧川に溺死するもの仆尸と共に萬を以て數ふ是に於て豪傑競ひ起りて漢に應ずる者多く隗囂は隴西に起り公孫述は蜀に起るに至れり。

東漢と匈奴及び西域の關係は如何

東漢が西域に着目したるは蓋し匈奴との關係より起れり匈奴は王莽が再び隙を開きしより頻に北邊を擾動しければ明帝の時耿秉、竇固等に命じて匈奴を伐たしむ又當時西域も北單于と結び數々寇しければ帝班超に命じて西域を綏撫せしめ即ち西域都護と戊、己校尉とを派遣して匈奴及び西域を監せしむ又章帝の時に至り匈奴を征す班超、竇憲前後北匈奴を破る。

佛教東漸の有樣を記せ

明帝の永平八年佛教東漸す當時佛教は摩竭陀國王の保護にて印度丼に外國に弘まりし者にて後南天竺のアンドラ王朝摩竭陀を呑丼し波羅門宗再び中天竺に勢力を占むるに及び稍々其勢力を失ひしが其際大月氏國勃興して北西印度を呑丼し頗る佛教を保護して是を西域の諸國に弘め而して漢は明帝章の頃專ら力を西域の服屬に致したるを以て終に此東漸を見るに至れり。

東漢衰替の源因を擧げよ

東漢衰替の源因をつくりしは外戚と宦官との跋扈なり章帝竇后を寵して外戚竇憲等を貴幸し和帝立ちて幼弱竇太后制を稱するに及び光武帝の遺謨遂に行はれず外戚漸く政を專にせり已にして憲逆謀あり和帝是を制する能はず故に宦官鄭衆に謀り以て是を斃す是より宦官の權も亦重く幼沖の天子相繼ぐに及び鄧氏、閻氏、梁氏等の外戚或は宦官と結托し或は是と抗爭して天下の事を掌り梁冀、質帝を弑するに至りしが桓帝の時冀兄弟宦官等の爲めに誅せられしより桓、靈二帝の間は宦官のみ獨り勢力を縱にせり。

黨錮の獄とは何ぞ

光武帝氣節の士を愛し處士嚴光等を以て不貲の士となす是より天下氣節を尚び學問の興隆と共に其風益々盛なり而して東漢の學者最も陰陽五行の學説を喜び天下の事皆是を以て是を解せんと事を勉む之其權勢にあらず威武に屈せず頻に時事を痛論して慷慨悲憤の涙を注ぎたる所以にして宦官の政を專ちにするに及び彼等は盛に是を指斥し水、旱饑、疫、地震、烈風等一に宦官等の權を弄するに由る者と爲せり是に於て宦官も亦大に是等の志士を嫉み黨を立て、朝政を誹謗すと稱し陳蕃、李膺、杜密等を囚へ前後數百人を死、徒、廢、竄に刑せり是を黨錮の獄と云ふ。

東漢末群雄割據の原因を問ふ

黨錮の禍ありし後天下漢室の滅亡近きに在るを知り綠林、黄巾等の賊兵を起し勢甚だ猛かりしが幾もなく曹操等に誅せられたり然れども天下の事日一日にあらずして諸賊蜂ひ起りしを以て朝廷新に州牧を置き重臣を以て是に當て政兵の二權を授けしに彼等は時勢を見て雄飛の志を發し天下忽ち群雄割據の形勢となれり。

三國の時代

三國興亡の表を記せよ、

魏＝曹操―曹丕―明帝―

蜀＝劉備―帝禪―

吳＝孫堅―孫策―孫權―孫皓―

―西晉武帝

魏の曹操の事蹟を略記せよ

曹操字は孟德爲人聰明にして謀略に富む靈帝の時黄巾の賊を平げて功あり董卓の廢立を行ふに及び群雄を率ひて卓を討し還りて兗州に入り其牧となる獻帝の洛陽に入るや操入朝して自ら大將となり武平侯に封せられて尋で帝を許に遷す是より政權曹氏に歸し天子は空位を守るに過ぎざりし是に於て帝を擁して四方に號令し張魯を關中に征し呂布を下邳に殺し袁術を壽春に破り袁紹を官渡に破り劉表を荆州に討ち遂に軍を進めて劉備を追擊せしも赤壁に於て大に敗らる其後屢々兵を吳に加へたれど克つ能はず後丞相となり冀州の牧を領し魏公に封せられ銅雀臺を鄴に作り已にして爵を進めて王となり天子の車服を用ひ出入警蹕す曹操の子丕立つて王太子となる

るや間もなく操卒し丕遂に獻帝に迫りて位を受け操を追尊して太祖武皇帝と成す

吳の孫策及び孫堅の事蹟を略記せよ

吳の孫堅は曹操劉備等と共に起りしも不幸にして早く死せり孫策幼にして父の遺業を繼ぎ年十七にして往ひて袁術に見へ父の餘兵を得たり舒の人周瑜なるものあり策と同年なり亦材略あり策に從つて起る是に於て東して江を渡り轉戰す向ふ處敵なく遂に江東を略し訴を發せんとし刺客の爲めに殺さる弟孫權代りて其衆を領せしが權亦頗る機略あり時に曹操大軍を進めて劉備を追擊して東に下る備救を孫權に請ふ權は周瑜の說に聞きて是に應じ其策を用ゐ曹操の大軍を赤壁に破る其後劉備の將關羽を破り荊州の地を定む劉備大に怒り自ら將として孫權を討つ權是に於て魏に通ず權の時に陸遜なる者あり能く兵を用ゆ屢々備の兵を破る其後魏と絕ちて專ら漢と速和し遂に自ら皇帝と稱し堅を追尊して武烈皇帝となし都を建業に移す權卒して吳遂に振はず

蜀の劉備の事蹟を略記せよ

蜀の照烈帝劉備字は玄德亦曹操と同時に起る夙に大志あり好んで天下の豪傑に結ぶ河東の關羽琢郡の張飛と相善し共に備に從ふて起る備始め勢甚だ弱し數々曹操の苦しむる處となる既にして諸葛亮を廬山に得たり亮は奇才の士赤壁の捷の如きは實に亮が力を多とす又龐統を用ゆ統も亦策士なり備に勸めて益州を取らしむ備因て關羽をして荊州を守らしめ巴より蜀に入り遂に劉璋を襲ひ益州を得たり益州の地たるや民殷にして國富む備是所を根據地となし蜀より漢中を取り遂に帝位に卽く既にして備卒す謚して照烈皇帝と云ふ子禪繼で立つ諸葛孔明遺詔を受けて政務を助け數々魏を征す遂に軍中に卒す亮は兵法に精しかりき亮卒するに及び蜀の威俄かに衰ふ後遂に魏の亡ぼす處となる。

諸葛亮の事蹟を略記せよ

亮は英邁にして兵法に精しく曾て八陣の圖を作る劉備に事へて忠誠を盡せし人なり曾て亮吳と和してより國力を養ふて兵甲を充し又南夷の孟獲を平けて後憂を除き遂に諸軍を率ひて魏を伐つ發するに臨み上表し頗る至忠至誠の情を極めたり亮進んで祁山を圍む隴西の諸郡應する者多し時に魏は明帝位にありしが張郃を遣して是を防がしむ魏蜀の兵街亭に戰ひしが蜀の將馬謖亮の節度に逆ひたるを以て蜀の兵大敗し漢中に還れり既にして亮又上表して蜀魏兩立の否を陳し兵を出して陳倉を圍みしが糧盡きて還れり後亦出兵して祁山を圍みしも魏將司馬懿來り防く後

糧盡きて漢中に還れり我紀元八百九十四年復魏を伐ち兵を分ちて屯田し永久の策を講ず又吳に約して魏を侵さしむ明文の來り拒ぐに及びて却けられたり亮は司馬懿と相持する事三ヶ月に及び數々戰を挑みしも懿は壘を高くし溝を深くして應せず亮遂に軍中に死せり。

司馬氏魏の天下を奪ひし大略を述べよ

曹操の子丕魏の位を踐み明帝と稱するや大に司馬懿を任用す懿沉毅にして術數權謀に富めり遂に政柄を握り漸く擅なり帝崩じ其子芳立つ曹爽是を補佐し頗る威權を擅にす懿其子師昭等と謀り兵を勒して爽等を收め自ら亟相となる懿卒して師大將軍となり芳帝を廢して文帝の孫髦を迎て立つ既にして師卒し弟昭大將軍となり遂に相國に進み晉王に封せらる晉王の威權獨り盛なり髦窃に昭を誅せんとを謀る謀もれ却て其黨の殺す所となる昭因て曹の孫璜を立つ昭死で卒し炎嗣ぎ遂に魏王に迫りて位を禪らしむ是れを西晉の世祖武皇帝となす。

西晉及南北朝時代

西晉武皇帝の政策及結果は如何

王室子弟を四方に分封し州郡の武備を撤して匈奴を塞內に居らしむ遂に匈奴晉を滅す。

八王の亂とは如何

武帝統一の業を遂ぐるに及び漸く政事に倦み遊宴佚樂を事とせしかば晉の衰亡已に爰に胚胎せり惠帝立つや外戚楊駿政を擅にす汝南王亮是れを殺して太宰となれり賈后是を銜み楚王瑋と謀り汝南王を殺し又楚王を殺せり趙王倫兵を擧げて賈后を殺し惠帝に迫りて位を讓らしむ是所に於て齊王長沙王河間王成都王東海王等八王相踵ぎて起り互に相攻伐す是を八王の亂と云ふ。

清談流行の源因を問ふ

第一東漢末氣節を尙ぶ事度に過ぎ黨錮の禍にかゝれる反動第二は東漢末老莊の學に本づき世道を嘲笑し去らむとせし反動此に源因あり。

五胡の亂とは何ぞや

漢魏以來鮮卑、匈奴、羯、氐、羌の五胡西北邊に蟠據し日に增し强大の色に顯し晉土を併呑せんと目せしが八王の亂に司馬氏の骨肉相殘賊して天下統御者のなきを時とし鮮卑よりは慕容皝起り匈奴よりは劉淵興り羯種よりは石勒出で氐種よりは李雄起り羌種よりは姚襄起り長淮以北

には復た晉土なきに至れり其極文那帝國は分烈して南北朝を現生するに至る是を五胡の亂と云ふ。

西晉滅亡の狀態を記せ

晉の惠帝は在位十七にして毒殺に遭ひ其弟懷帝の五年匈奴の劉淵の子聰の爲めに帝都洛陽を攻め落され懷帝夷の爲めに殺されしが其翌年武帝の孫愍帝立つて長安に都せしも即位の四年後又もや蠻夷の爲めに攻められ長安陷りて愍帝降り是に於て西晉全く滅亡しぬ。

石勒の事蹟を略記せよ、

石勒、劉淵の部將となり劉聰、劉曜、王彌等と共に晉に迫り洛陽を陷れ次で長安を取れり劉曜は淵の族子たるを以て長安に自立し國號を趙と云ふ石勒も亦劉曜を忌み隙ありしが曜が勒の使を殺すに至り勒は別に國を立て、趙と號し襄國に都したり我紀元九百八十八年曜は勒と洛陽に戰ひ大敗して擒となる是に於て漢の舊土悉く石勒の有に歸す勒遂に帝を稱し南方東晉を伐ち大に地を江淮の間に開き勢甚だ盛なり氐王苻雄等皆降り趙に服す勒帝位にある事六年にして殂す。

王敦の反亂とは如何

元帝の安東將軍として江東を鎭するや王敦從弟王導と心を同ふして翼戴し敦は征討を總べ導は機政を專らにし群從子弟皆顯要に列せり敦揚州の刺史を領し征討諸軍を都督し進んで鎭東大將軍となせしが王氏の權燄を抑損す敦が參軍錢鳳等敦の異志あるを知り敦に勸めて兵を擧げ劉隗刁協を誅するを名とし進みて石頭城に據る帝王導を以て前鋒大都督となし諸軍を督して賊徒を討たしめしが皆大敗してかへれり元帝不得止百官を遣はして敦に會せしめ大赦して敦を丞相都督中外諸軍事江州の牧となす敦益々暴慢なり時に元帝は憂慮の餘病崩す明帝立つ王敦遂に位を得んとして反す明帝是を伐たんとす折りしも敦病にかゝる故に兄王含をして建康に向はしむ明帝奮戰王含大敗す敦起たんとし遂に死す官軍遂に錢鳳以上の諸將を誅し悉く內亂を平定せり。

淝水の戰を略記せよ

秦王苻堅既に大彊土を略有し終に江南を圖るの意あり大兵を發して南伐す晉謝石、謝玄を將として是を禦がしむ我が紀元千四十三年晉兵大に秦軍を淝水に破れり結果慕容垂は自立し燕王と稱し姚萇は秦王と號せり其他燕、秦、凉の諸國群起し江北は群雄割據の地となれり

南北朝の興亡を圖表にて示せ

後魏の孝文帝國風改改の次第を擧げよ

後魏は元夷狄より興りしを以て刑罰濫にして文物備はらず孝文帝の時に至り禮樂を定め文物略整然たり又國風の鄙陋を革めんとして都を洛陽に遷し胡服胡語を廢し一に中國の風を採用せしめ次に宗室をして中國の各族と雜婚せしめ漢人種と婚するを奬勵せしが功臣舊族の多くは國風を慕ひ是を悅ばず爲めに反を謀る者もあり且是れより華侈柔弱の風行はれ遂に國勢衰微の一端とはなりぬ。

後魏の大武皇帝宋に侵入せし次第を記せ

後魏の大武帝既に北方を統一し其勢盛なりしが宋河南の地を取れりと聞き直に其地を蹂躪せんと決しける是より先き宋魏は連年互に相攻爭せしが王玄謨宋の文帝に勸めて後魏を伐たんとす波慶之諫めて曰く耕事は當に奴に問ふべし織事は當に婢に問ふべし今何を以て國事を青書生に諮かるやと文帝是を聽かず玄謨をして師を出さしめ碻磝を取り滑台を圍ましむ後魏太武帝是に於て自ら將卒を率ひて河を渡り衆百萬と號し皷聲天を貫く玄謨懼れ走れり魏人追下南し揚子江上に至りて江を渡らんとし大聲す宋の建康の人民大に驚き逃避する者多かりしが遂に江を渡らずして師を班したり此擧や江北六州の地は侵掠を受け至る處赤地となり家屋は兵火に燬り巷燕林木に無ふに至れりと其次第實に追想す可き物あり

後魏東西に分れし所以は如何

宣武帝孝文帝の後を承け庸愚なり魏の改是れより衰へ其子孝明帝幼弱にして胡太后制を稱するに及ひ衰亂の兆遂に蔽ふべからず太后の帝を弑するに當り爾朱榮先づ起りて朝權を專らにし榮誅せられて爾朱氏衰ふるに及ひ高歡と云ふ者是を斃して大權を掌握せり孝武帝則ち歡を誅せむとして成らず西走して宇文泰に依る是を長安に奉ず歡別に孝靜帝を鄴に擁立す是より魏分れて東西となり歡は東魏泰は西魏に在りて連年兵を交ふるに至れり。

蕭道成の簒奪を略記せよ

蕭道成宋に仕へて功勞あり遂に其權勢を擅まゝにし大ひに威力を養ひ居りしが後廢帝を弑して順皇帝を擁立するに至れり是に於て袁粲沈攸之等道成を捕へて誅せんと謀りしに却て道成の爲めに殺されたり道成是に於て相國となり齊公に封ぜられ九錫を受け已にして王となりて宋の禪を受け國號を齊と云へり後又順帝も道成の爲め弑せられたり。

南北朝の時代觀化は如何

南北朝の時代には社會の規律萬事に紊れたるが如し云はゞ彼弑逆簒奪の多なる事或は放縱淫佚の君多き事等全く源因あらずんばあらざるなり蓋し北朝は夷狄より起りし者にして聖人の道は無論解する能はず又南朝は東晉遊隋の餘風を傳へて心を教育に注くなく且又前秦に衛道安、後秦に鳩摩羅等出てしより佛教益々盛に南北朝に至りては其盛を極め古來よりの儒教は其影響の爲めに秩序を敗られたる等社會紊亂の因たらずんばあらず。

隋唐の時代

隋が南北朝を統一せし次第を擧げよ

北朝が北齊、後周の二國に分れ居りし當時深沈にして儒學を好み能く其國を治めたる後周の武帝は北齊帝の淫佚にして其國政亂るゝに乘じ齊を滅ぼし後梁を併せたり然るに武帝の歿後外戚楊堅政權を握り遂に靜帝の禪を受く是れを隋の文帝となす文帝陳帝叔寶の逸遊に耽るを見晉王廣をして南朝なる陳を討滅せしめ我が紀元千二百四十八年遂に天下を一統せり

隋の文帝の治績を記せ

文帝天下統一の後は專ら內治に心を用ひ節儉を守りて賦役を輕くし刑辟を正して百姓を愛撫す又禮樂を正し文學を奬勵せり。

煬帝の治績と隋の末路の關係は如何

煬帝の立つに至り內は奢侈に耽りて或は苑囿を作り或は宮殿を營み又は運河を開きて敢て下民の疲弊を顧みず外は無名の師を動して南は林邑を平げ西は吐谷渾を破り北は突厥を服し東南は琉球を伐ちぬ折節し高麗が遼西を破るに乘じ帝大舉して三度是を征せしが軍敗れて還りぬ是に於て國內騷擾し百姓怨嗟せり然るに帝なほ遊宴に耽り奢侈を極めしかば群盜諸處に起り群雄各

地に蜂起し突厥邊境を窺ふに至り隋の末路を來たす源をなせり。

李淵の事蹟を記せよ

隋の煬帝の末時國政漸く行はれず天下麻の如く亂れて群雄各地に蜂起せり是に於て唐公李淵も其次子世民に勸められて兵を大原に興し頻りに諸郡に勝ちて進んで長安に入り遂に帝が江南に遊幸せるを廢して代王侑を立て恭帝と號す尋て煬帝弑せらるゝに及び恭帝に迫りて其禪を受け國を唐と號す自らは唐の高祖神堯帝となれり時に我が紀元千二百七十八年なりき。

玄武門の變とは何ぞ

唐興りし七年次子世民率ね群雄を并合し獨り竇師の都突厥に結びて服せざるのみとなれり高祖の長子建成三子の元吉と世民の功を嫉み是れを殺さんと謀る世民是を知り翌日兵を玄武門に伏し建成元吉の入朝を伺ひ是れを射殺せり是れを玄武門の變と云ふ高祖世民に位をゆづる。

唐の太宗の內治は如何

高祖位を世民に傳ふ是を太宗となす三代以后の豪傑と稱せられ其施設せる所後世の模範となれる者多し三省六部の官制を定め均田、租、庸、調の法を布き齊、隋の遺制を酌料して十道府兵の制を立て隋の制に從ひ笞、杖、徒、流、死の五刑を定めて是に贖銅の寬典を附し弘文館に天下の圖書を集め學校を增設し大に文學を勵す又能く房玄齡、杜如晦等文學館の十八學士と王珪、魏徵等とを用ゐ以て內治の整備を致せり。

太宗の外征を問ふ

太宗は內治の緒に就くに及んで漸く外征の師を出し李靖を遣はして突厥を伐たしめ殷志玄を遣はして吐谷渾を征せしめ侯君集を遣はして吐蕃、高昌、西突厥等を平定せしめ貞觀十八年には自ら兵を率ひて高麗を征し遼東、白巖の二城を下し安市城を圍みしが利あらず師を班せり此他李世勣は命を奉じて薛延陀を討滅し王玄策は印度に使して中天竺王を捕へ歸り高侃は西突厥を討ちて悉く其諸部を平定す

唐と印度の關係は如何

太宗の世は印度に於て有名なる戒日王の時に當れり唐僧玄奘の來りて法を求むるに及び其虛實を審かにして使を唐に通せり太宗喜び使を遣りて是れに答へ後又王玄策を遣りしに戒日王已に殂し權臣簒立の難ありしかば玄策是れを定めて歸れり是より印度の諸王侯皆唐に貢す

唐と大食との關係は如何

回教の祖マホメットの死しアブーベーカー繼ぐに及びアラビヤ地方を平定し尋て波斯を侵し大食國を建てしも唐の波斯を助けむ事を恐れ好を通して歡心を買ふ蓋し高宗の時代にして波斯が頻りに唐に依りて其國の破滅を拒がむとしたる際なり。

高宗の外交を記せ

高宗亦太宗の遺志を繼ぎて頻りに遠征の師を出し西突厥、高麗、百濟、新羅等の諸國を平定し又大食國と好を通ず。

則天武后の事蹟を擧げよ

武后は高宗の父太宗の宮女なりしが高宗其宮女の蕭妃と通ずるに及び王后自ら安んぜず武氏を入れて蕭妃を除かんとす高宗遂に武氏に通じ武氏王后となり則天武后と稱す朝政に干預し遂に帝の崩後中宗を廢して弟なる豫王旦を立て自から聖神皇帝となり國を周と號せり然れども武后性明敏にして能く人材を登用し狄仁傑、張柬之等の豪傑を用ゐ其政を致せり。

韋氏の亂を記せよ

中宗の廢せられて廬陵王たるや數々自殺せむと欲し毎に皇后韋氏の止むる處となれり故を以て深く韋氏を德とし復位の後頗る朝政に干預せしむ是れより韋后武三思に通じて政を亂し張柬之等の功臣を讒害し皇太子を殺し帝の是を疑へるあらんを懼り是を弑せり豫王旦の子隆基兵を擧げて韋后并に其黨を誅す是を韋氏の亂と云ふ。

開元の治とは如何

隆基睿宗帝の禪を受けて位に卽く是を玄宗帝となす玄宗開元年間の治は大宗貞觀の治に讓らず姚崇、宋璟等の賢臣を用ひ儉約と寬宏の政を執り精勵治を圖りしかば天下大に治まり百姓殷富にして學術工藝等も大に進み上下昇平を佐けし故二拾餘年間は朝廷の施設する所過擧なかりしと是れを開元の治と云ふ。

玄宗の對外政策は如何

玄宗卽位するや大食、吐蕃、回紇等の諸寇が唐の衰亂に乘じ頻に邊塞を侵せし故十節度使を置き兵馬の權を與へ邊陲に配置して外夷に備へ又關隴卽ち府兵を置く。

唐の文學と日本との關係は如何

唐の文學は玄宗の時頗る盛なりしものにして我が奈良朝時代也彼の有名なる李白、杜甫、白樂天等の現れしも此時なり又韓退之の起るに及び八代の陋習を一洗し以前の文章等とは大に異り遠意の散文を用ゆるに至れり又是と同時に柳宗元あり其文雄深雅健見る可きものあり又白樂天の作物は平易通俗にして夙に日本人の朗吟する所となれり當時我が國も文弱の風あり元正帝の二年吉備眞備等の唐に留學し十七年後歸るに及び我が國文學上に一大變化を來せり。

安祿山の亂とは如何

玄宗天寶年間の政は全く開元に反し李林甫を相とし楊貴妃を寵し安祿山の巧佞を愛したるが故に祿山漸く異圖を挾み貴妃に結托して異圖を蔕ふ祿山貴妃に結びて帝の親任を得平盧、范陽、河東三鎮の節度使を兼ぬるに及び遂に亂を起して洛陽、長安の二都を陷れ帝は倉皇蜀に走り回紇の兵を借りて僅かに是を支ふる事を得たり然れども久しからずして賊軍中に內訌起り祿山は其子慶緒に弑せられぬ。

安祿山の亂に於ける名臣の事蹟を記せ

祿山反するに及び諸方瓦解河の南北大抵賊に沒し河北二十四郡中能く賊に抗する者唯々平原城の顏眞卿、常山城の顏杲卿、睢陽城の張巡とのみなりき是れ安祿山の亂に於ける唐の名臣也。

藩鎮跋扈の狀態を記せ

安史の亂は遂に平ぎしと雖藩鎮の專横は是より益々甚だしく回紇、吐蕃の入寇あるが上に節度使（所謂藩鎮）次第に增加し其勢力は兵政の二大權を握り殆んど王侯の如し然れども朝廷是れを制する能はず安かに乞を入れ任命し其暴曰はん方なし是處に於て德宗は兩稅の新法を起し富國を計り藩鎮を制せんとせしが成らず英武なる憲宗起るに及び初めて是を鎭壓せしとは雖憲宗意滿ちて漸く驕侈に吻り宦官を信任す天下復た亂れ藩鎭再び勢を復しぬ。

唐衰亡の源因を記せ

源因三あり一は則天武后の亂、韋氏の亂、及び安史の亂が一因をなせるものにして二は藩鎭の跋扈卽ち安史の亂の降將を容れて悉く節度使たらしむるに及び將等は終生降參せりと云ふ恥をまぬかれざるを知り相謀り相結托し朝廷是を制する能はざりしは直接源因なり第三は朱泚兵を擧げて京師に迫りし時宦者功あり是に於て宦官の專横又甚だしく唐衰亡の源因をなせり。

唐と西方諸國との交通は如何

陸路は中央亞細亞西部亞細亞を以て交通線とし海路は印度の各港唐に於ては泉州、杭州等に於て貿易せり阿剌比亞人は唐の初に廣東、乍浦、寧波、福州等の地に來て交易をなし、事あり唐高祖使を遣はして好を修め阿剌比亞王も亦其母舅賽爾を遣して來約せしめたりと云ふ是れ交易の起原にして西洋が支那の絹布に目する處ありたるは遠く後漢の時代に在り章帝の時班超が使を羅馬に通して後桓帝に至りて羅馬帝の使節は海路を取り安南を經て漢に通せり唐は直接結果大に財貨を富ませり然れども祓教、回教、景教等の如き宗教の輸入は免れざりき。

五季の時代

季の興亡を系統的にて示せ

▲後梁 1. 朱全忠 2. 末帝

▲後唐 1. 李存勗（李克用の子） 2. 明宗嗣源 3. 閔帝從厚 廢帝從珂

▲後晉 1. 石敬瑭 2. 出帝重貴

▲後漢 劉知遠 隱帝承祐

▲後周 1. 郭威 2. 世宗 3. 恭帝

後梁の興亡を記せ

後梁の太祖朱全忠は初めは無賴にして黄巢に從て盜賊を業と爲し居りしが唐に降りて全忠の名を賜はり數々四方の雄賊を敗りて功を立て威權大に加はりたり後李克用と隙を生じ屢々雌雄を爭ひしが遂に克用を屈せしめて唐室を傾け帝位に卽き國號を梁と改む時に克用は晉陽に據りて晉王と號し居りしが太祖殂して均王帝位に卽くに及び克用の子李勗數々梁を攻めて大ひに是を破り遂に梁を亡して帝位を奪へり梁が太祖帝と稱してより二世十七年にして滅亡せり

後唐の興亡を記せ

晉王李存勗後梁を滅して父克用に繼ぎて晉王の位に洛陽に卽く時に年十七なり所謂後唐の莊宗なり彼後唐に君臨するや岐は使を遣して入貢し蜀は國を擧げて降を請ひたりしかば帝は漸く驕恣の念を生じ意を政治に留めず藩鎭爲に憤怨して將士事を擧ぐるに至りしと雖明宗是れに代り

て能く國勢を挽回し唐威四方に振ひて海内一時は平安を得たり然れども帝崩じて閔帝從厚嗣立するに及び李從珂、石敬塘の盛名を忌みて是れを殺さんとしければ從珂先づ兵を擧げて簒立し敬塘は契丹と合して從珂を伐ち洛陽を陷れ帝位に卽き晉の高祖皇と稱す。

宋及び蒙古の時代

宋の太祖の事績を擧げよ

宋の太祖趙匡胤は位に卽きたる後内には租賦刑辟を寛にして官吏の任用を愼み又大に文學を奬勵せしが深く心を藩鎭の宿弊に注ぎ巧に功臣の節度を奪ひて是れを文臣に授け且つ州郡に通判を置きて鎭將の政權を殺ぎ轉運使を設けて其財賦の權を奪ひ又宿衛の强横に對しては一方には諸道の兵を選みて入衛せしめ一方には禁旅を分遣して邊城を守らしむ是に於て内治は漸く整ひしと雖五季以來各地に割據せし諸國は未だ全く宋に服せず故に太祖諸將をして湖南、後周、後蜀、南漢、南唐、北漢等を討滅せしめたり。

宋が遼を攻ちし次第を記せ

遼は初め宋と和好を通じたりしが太宗の北漢を征じて更に兵を幽州に進むるに至り遼の景宗大に怒て援兵を出し宋軍を邀退して幽州の圍を解けり斯て兩國の平和全く破れしよりは南北互に攻爭し涿、朔、深、德等の諸州を爭ひしが遼兵は强くして宋の北邊は連年其來侵に艱めり我紀元千六百六十四年に至り遼の聖宗は更に大擧して澶州を圍めり時に宋は眞宗の世にして寇準同平章事たりしが準は帝に勸めて是を親征せしめ聖宗の和を通ずるに及びて遂に澶淵の盟を結び宋は毎歲絹二十萬匹銀十萬兩を遼に贈ることを約し且宋を兄とし遼を弟として互に其兵を收めたり。

王安石の新法とは何ぞ

イ、均輸法　ロ、青苗法　ハ、常平官
ニ、預買法　ホ、募役法　ヘ、市易法
ト、方田均稅　チ、保甲法　リ、保馬法

司馬光の略歷を記せ

司馬光字は君實陝州の人也仁宗の朝に諫院に知たりしが三劄を進めて仁宗の知を受く英宗の朝に濮王を崇奉する典禮を議し宰相の意に忤ひて斥けらる神宗立つに及び侍讀學士となりしが帝

命を以て資治通鑑を著し帝自ら序文を製す後樞密副使に除せられしも辭して拜せず數々新法の害を言ひて外を請ひ出でゝ西京留司台に判たり洛に居る十五年哲宗立つに及び召されて執政となり元祐元年に左僕射に拜せられ門下侍郎を兼ねしが僅かに八閲月にて卒せり後大師温國公を贈られ文正と謚せらる。

南宋の起りも所以は如何

金遼を滅ぼせし後口實を設けて宋を攻む朝議講和を主として李綱の死守説行はれず銀、絹、牛、馬數千萬を金に輸し中山、河間、太原二十餘郡を割き徽王を質とするを約し金に和を請ひ結を得たり然れども金は三鎮割讓の詔を得未だ銀絹等を取るに及ばずして兵を返せしも宋約に背きしかば金の太宗大に怒り復南侵し徽宗、欽宗の二帝を虜にす是に於て元祐孟太后欽宗の弟康王を應天府に位に卽かしむ是を南宋の高宗と云ひ是れより後を南宋と稱す。

岳飛と秦檜の事を記せ

南宋の高宗卽位十三年都を臨安に定む此の頃金と好和の議起る是を首唱する者は秦檜なり是を非議するものは武士全体並に儒者なり時に諸將中勳功最も盛にして威を中原に輝かし上疏して

河北の恢復を圖り進で金軍を伐ちしは岳飛なり秦檜自ら思ふ岳飛を殺さざれば和成らずと遂に岳飛父子を殺せり飛死せし時其背に盡忠報國の四大字を涅せるあるを見て人皆其冤罪を悲しめり。

南宋の亡源を記せよ

南宋は元の侵寇なきも金にして亡ひずんは金必ず南宋を略せん南宋は建國以來小にして兵弱く且常に強大の敵國を有しあまつさへ凡庸の君主相繼ぎ小人奸徒朝政を紊亂して忠臣賢士を害し遂に自滅したるなり。

文天祥、張世傑、陸秀夫の事を記せ

皆南宋の末路に出でし忠勇義烈の士にして南宋が元の爲めに侵略せらるゝを憤り宋室の恢復を謀りしと雖圖力已に支へず三士相次で皆斃れ遂に宋の血族を絶つに至れり彼の文天祥の天氣の歌は後世忠臣義士をして感泣せしめたる事實多大なるものといふべし。

賈似道の略歷を擧げよ

元の憲宗は征西軍を起すと共に兵を宋に加へ親ら蜀に入れば忽必烈は河南より江を渡り瓜瓦喰

台は交趾より北上し三方宋を攻む賈似道南宋の理宗の命を奉じ將となりて是れを防ぐ賈似道密使を忽必烈に遣はし臣と稱し幣を納る、を約せり會々憲宗營中に歿す忽必烈皇弟アリブカが和林にありて大汗たらんとするを聞き賈似道の請を納れて北に歸る賈似道夏貴をして是を尾擊せしめ以て蒙古の兵を破れりと稱じ之を以て己が武功となし益々理宗の寵任を得て平章軍國重事に進み頻りに威權を弄じ敢て國難を顧みざりしが孝恭帝の時遂に貶せられて途に殺されたり。

宋の文學を記せ

宋の文學は唐代よりも勢あり其中妙手は蘇老泉、蘇東坡、蘇子由、王安石、歐陽脩等にして斯道の大家續々輩出せり其中胡銓の封事文天祥の天氣歌の如き慷慨悲壯頗る後世の傳唱する所となる陸放翁の詩は李杜を拔く。

宋の宗教を記せ

宗教は佛教、道教にして佛教には禪宗最も盛にて明教、佛鑑、佛眼、佛印、圓悟、大慧等の高僧輩出し道教は眞宗、仁宗、徽宗の際に朝廷の崇奉を得て盛なる勢を有せしが其後漸次衰微せるが如し。

蒙古の興起を問ふ

宋金の中原を爭へるに當り蒙古族の酋長にエブカイと云ふ者あり頻に近方の諸部を併呑せしが其死するに及び部落離散せりエブカイの子を鉄木眞と云ふ長ずるに及び英志あり復漸く諸部を糾合して韃靼部を平げ次でメルキ、タイヤ、ウツ、ケライ、等を并せてナイマンの強族を斃し我紀元千八百六十六年即ち金の章宗、宋の寧宗の時を以て位にオーノン河源に卽き成吉思汗と號す是れ蒙古の太祖なり。

成吉斯汗の西略は如何

成吉斯汗ナイマンの遺族屈出律(クシュリ)が西遼を奪ひて仇を蒙古に報せむとするを聞き直に其將チエベを遣りて是れを斃し終にホラズムが其隊商と使者とを殺したる罪を責め討ちてムハメットを走らせ其子ヂエラルウッヂンの南に走るを逐ひて將軍ボラッツを印度に入らしめ又將軍ツブタイ、チエベをしてムハメットを逐ひ裏海上の一孤島に赴かしめ其身は本國に歸軍せり而してボラッツの軍は酷暑の爲めに功なかりしもツブタイ、チエベの軍は獨りムハメットを斃したるのみならず突厥種のキプチヤックと並に是れを援助したる露土亞の諸王侯を破りアゾフ海附近の地

を侵略せり。

成吉斯汗大成功の源因を問ふ

成吉斯汗僅かに二十年に足らずして空前絶後の大版圖を造りし源因五あり一、蒙古兵は出陣の時と雖納税の義務あり故に妻は家を守りて負擔を果すが故に財源欠乏する事なし二、軍隊の組織極めて厳にして部長は無限の權力を有し如何なる事實あるも是に違背するを得ず若し犯者あれば上下を問はず厳罰に處す三、蒙古には「クリルタイ」と云ふ大會の組織ありて蒙古の諸王族諸將及諸酋長等より成立する者にして此大會の決議に依らざれば蒙古の大汗たるを得ず故に大汗は威望ありて且つ大器の者にあらざれば大汗たるを得ず四、蒙古の騎兵は一人に乘馬三四頭を用ゆ而して交代して乘る故乘馬の疲なし又其騎兵頗る精鋭なり五、此等の騎兵は行軍中急要の時は馬乳馬血を吸ひ其乾酪を食とし旬日を保つ故進行極めて速かなりし事等其源因の大なるものなり。

蒙古時代の東西洋の交通は如何

鉄木眞が蒙古の大汗となりしより忽必烈が宋を滅す迄僅七十年に足らずして空前絶後の一大帝國を現出し多くの小國全く亡びし故彼是商人の往來に不自由を感せず又政治上軍事上の爲め道路宿驛を設け守備兵を配置せしが故行旅者安全を得て往來頻繁となれり是所に東西洋交通の面目は一新せられ頗る稱す可きものありたり。

マルコポーロの略歴を記せ

マルコポーロは伊太利ヴェニスの人也支那に來り（地中海を航じてシリアの地に上陸し小亞細亞の各地を經て遂に黎嶺を越へ天山南路より青海地方を跋渉して元の世祖に事へ後に廣東より海に航じて爪哇、暹國、印度等の諸國を巡り再び小亞細亞を通過し黑海を經て國に返り亞細亞大陸旅行記を著し始めて日本を世界に紹介せり。

元及び明の時代

元初世祖の外征は如何

世祖第二高麗を屬せしめ是れを介して日本を征せしに事成らざりければ更に兵を轉じて緬國を征し以て暹國を降し占城及び爪哇の叛を伐ちしが占城及び爪哇に發したる遠征軍は好結果を得

さりき世祖をは忽必烈の事也。

世祖の内治を問ふ

官制を改め諸官の長には必ず蒙古人を用ゐ其他の諸官には廣く外人登用の道を開き伊太利人マルコポーロを始め西歐人波斯人等多く有爲の人材を用ひ漢人の兵器私藏を禁じ又文學を奬勵し宗教を厚遇し外征の爲め國庫欠乏せしを以て聚斂の臣を用ゐて苛法を熟行し次で紙幣を發行せり。

海都の事蹟を略記せよ

海都は元の太宗の孫にして合失の子なり憲宗崩じて世祖の立つや和林の留守アリブカと共に兵を擧げ世祖に抗じ事成らざりしと雖以後蒙古の大汗を稱して世祖の召に應せず察合台國のバラクを及び金帳國のマンガと結びて元の直轄地なるトルキスタン及びトランスオキシアナを略取しバラクの死後は海都自ら察合台汗を任命して共に元室の侵略を謀り遂に二汗大兵を率ひて回疆に侵入し和林に迫まんとせしが世祖の將海山に擊退せられ一時は平穏なりしが海都は繼て東蒙古の諸汗と謀を通じ共に元を攻めしかば世祖は自ら東軍に當り海山は西軍に當り共に海都等を擊退せり後ち世祖崩じ成宗の立つに及び海都は更に大擧して和林に向ひしと雖元兵強くして志を遂げず尋で海都も死せり。

元朝の滅亡せし源因は如何

世祖南征北伐の故を以て國庫欠乏し許衡等の諫を容れずして阿合馬を登用し頻に收斂を事とせしむ百姓是れに苦む帝又吐蕃を征せるの日喇嘛教を得て是を信じ遂に僧侶の跋扈を生じ王位承繼の際爭亂數々起り權臣私を營むに至る。

元の文學は如何

詩文は大抵宋代を學びたる者にして儒者には姚樞、許衡、劉因、金履祥等其名最も高く詩には元好問、黃溍等の大家あり戲曲に西廂記小說に水滸傳等出でたり。

元の宗教は如何

宗教は喇嘛教最も盛なりしが東西兩洋の交通頻繁なりし時期にて景教稍々支那內地に傳播せり其他道教は勿論回教の如きも多少東漸したる形跡あり。

明の太祖の外征を問ふ

明の太祖朱元璋帝位に卽くや北方元の餘黨を平定せんが爲めに將軍徐達、常遇春を陝西、甘肅地方と元の上都に送り順帝及び其太子アユッシリダラ並にタクチムールを破り次で太子の弟トクスチムールが父兄の後を襲ぎたるを走らせ以て漠南の地を定めしが是と同時に湯和、傅友德等の諸將を南方に派し夏王明昇と元の梁王バトサヲアルミを平げ因りて雲南、四川及び大理の諸地方を定む。

明の太祖の內治を問ふ

太祖四方を平定するに及び心を內治に用ゐ諸皇子を要地に封じ以て宋室孤立の弊を警め又北邊の諸王には特に禦寇の大任を附して大兵を自由にするの權を與へ又大明律を制定し賦歛を輕くし兵制を定めて民兵万戶府及び衛所、官軍を設け將軍は事あるの日にあらざれば任命せず又六部の官省に國務を分担せしめ天子自ら統卒せり其他學校を起し禮樂衣冠の古俗を復して蒙古風を打破じ后宮內豎の政務に干預するを禁ず。

永樂の變とは何ぞ

明の太祖崩じて其孫惠帝立つに及び曾て太祖が北邊の諸王に特に禦寇の大任を附して大兵の自由權を與へたるを以て諸王遂に帝室に禮なく惠帝が齊泰、黃子澄の言を用ひ諸王の封土を削るや燕王棣は忽ち反して靖難の師を起し帝を遜ひて自から位に卽けり是れを成祖と曰ふ而して永樂と改元す方孝孺は惠帝の臣なるを以て成祖に抗せしが成らずして節に死す此變を一に靖難の變と云ふ。

帖木兒の大業を記せ

帖木兒は蒙古の蹤族にして察合台の部將なりしが其衰頹に乘じ中央亞細亞を奪ひサマルカンドにて汗位に卽き察合台汗の領土を略し西ホラズムを定め又伊兒汗の領土を兼併したり帖木兒は又ドリタミシユをエテル河畔に破れり當時印度は奴隷朝衰へて國內大に紛亂したりしが帖木兒は是れに乘じ印度に侵入しデーリを陷れて掠奪を恣にし又兵を班して西に向へり此時オトマンは土耳古帝國を建立し勢ひ漸く强くバヤゼドに至り西は匈牙利を侵し東羅馬に迫り東は埃及と結び帖木兒の領土を侵さんとせり帖木兒は印度より「シリア」に向ひ第一埃及の兵を破り後援を絕ちバヤゼードをアンゴラに破りて是を擒にし悉く小亞細亞の地を定め東に歸れり又明を滅さんとせしが東征の途中にて死せり時に我紀元二千六十五年なりき。

明代の倭寇とは何ぞや

明の世宗の時代には沿海常に倭寇の苦むる所となれり倭寇とは我邦南朝の餘類が海上にありて盜を爲し高麗及び明の沿岸を掠略せるを謂ふ太祖の時代にも已に此事ありしが足利氏衰ふるに及びて内國を制する事能はざりしと明の奸商が我商人を虐遇なしたるとに由り我商人の亂入に組する者漸く多く我紀元二千二百九年以來頻に浙東附近を撫掠せり明は俞大猷等の盡力に由り僅かに是を掃蕩す。

東林黨の意義は如何

神宗在位の間は内難外患交々至り頗る頻煩なりしも在朝の臣僚毫も意に介せず唯高位高官を望むのみなりき故に顧成憲先づ朝を去り高攀龍鐵一本等と學を東林書院に講じ恣まゝに時政を譏議し人物を評論せりされば氣節を尚ぶの士は往々是れに應和して東林黨の名一世を風靡せり。

明代宦官專横の始めを記せ

太祖、惠帝共に宦官を能く抑制せられしが成祖位を奪ひて立つや宦官中に内援せし者ありしを以て是れを賞するの餘り是れを任用し兵權を與へ政務に干預せしむ是れ明代宦官跋扈の始め也

其後宦者黄嚴等趙王高燧を推して主となし不企を圖りて誅死せる事實ありし以後は宦官の專横一層甚だしかりき。

土木の變とは何ぞ

瓦剌の酋長馬哈木の孫也先に至り滿州地方の諸部を併呑して北方の全權を握り大に明の邊境に寇せり英宗則ち宦者王振と與に是を大同に迎へ擊ち大に土木堡に戰ひて敗績し却て也先の擒にする所となり也先は是れを好餌として過大の贖金を求め數々來侵せしが于謙等能く是を拒ぎ且景帝を立て、彼の望みを空しくせしかば也先遂に英宗を還し明と和せり。

明滅亡の始末を記せ

十七代毅宗崩する時十四代神宗の孫福王南京にあり立ちて帝と稱す清の世祖兵を遣はして是れを陷れ福王を蕪湖に虜にす明人更らに唐王を福州に立て魯王は紹興に在りて是に應じ陳子龍、吳易、盧象觀等亦並び起りて江西、浙江、福建等の諸地を固守せしかば世祖は諸將を分遣して西は四川を平げ東は浙江、江西を降し遂に福州に迫りて唐王を汀州に捕へ魯王を逐ふて厦門に走らしむ後二年魯王害せられて崩し明室全く滅亡せり。

鄭成功の略歴を擧げよ

父は芝龍と稱し母は我が平戸の人なり明の魯王清軍に逐はれ廈門に來るに及び鄭成功是を擧し其軍勢一時は四方に振ひて鎮江、南京等も再び其有に歸したりしが清兵又破るに及び鄭成功魯王を奉じ我が二千三百二十一年台灣に來り我が國に援を求めしかども鎖國主義の德川なれば其意を果さず翌年台灣に死せり。

明の文學は如何

明初の儒學は全く程朱なりしが後王陽明出づるに及び陽明學の勢盛になり遂に二學派となる詩文には劉基、方孝孺、李東陽、歸有光等の大家出で戲曲小說も亦發達し西遊記、金瓶梅等有名なる小說皆當時に成れり。

明の宗教は如何

宗教は喇嘛教最も盛にして紅教、黃教の二派に分れ頻に民間に弘まりしが耶蘇教も東西交通の益々盛なるに從ひ東漸し此時代には「ジェスイッ」「ドミニカン」の二派次第に流傳せしと云ふ。

清の時代

清の太祖の事蹟を問ふ

清の太祖は姓を愛親覺羅と稱し名を奴兒哈赤と云へり明の神宗の十一年我が紀元二千二百四拾三年正親町天皇の天正十一年に當り始めて兵を滿州のホトアラに興し父祖の仇ヨカケヲを伐ちて是を破れり時に四隣には滿州部、長白部、東海部、扈倫部等の諸部族ありしが太祖は先づ兵を出して滿州部及び長白部を降し次に扈倫及蒙古の連合軍を破りて扈倫の三部を略し尋で東海部を併せて後金皇帝と稱し更に兵を進めて明軍を破り扈倫の或る部を滅し且つ瀋陽及遼陽を略取せしかば其領有東は海に至り西は遼河に及び北は黑龍江に達し南は朝鮮に接せり卽位後五年に始めて國政を定め十六年蒙古字を國語と定め滿文を頒つ三十三年始めて佛寺を造る。

三藩の反とは何ぞや

聖祖の十二年に至り平西王吳三桂、平南王尙之信、靖南王の耿精忠の反あり何れも其統理せる地方の兵食權を握れるが故に帝の是れを憚かれるを知り懼れて反謀を起せしものなり帝は九年

の功を積みて遂に三柱の孫吳世璠を誅し其他を降して藩鎮の憂を除けり。

モーガル帝國とは何ぞや

我が紀元二千百六十二年頃帖木兒の裔バーベルは阿富汗より起り當時印度に於て路堤王家覩貝孫家を滅ぼして羅特布覩種族と爭ひ國勢大に衰へたるを以てバーベル遂に印度に入りて台里を陷れ有名なるモーガル帝國を建設せり。

遅羅開國の次第を述べよ

遅羅は第十七世紀の初プラサロンタム王位に卽くに及び日本の山田長政を用ゐ其國亂を平げ其後希臘人コンスタンチンの勸めに依り佛兵を來駐せしめしを以て國人服せざりしが鄭昭と云ふ者遂に恢復して都を盤谷に奠め昭の嗣るゝに及び其治華是に代り貢を清に納れて其封冊を受け爾來今王に至る迄次第に其國力を增進し歐米諸國の文化を納るゝに力めたりき。

鴉片戰爭とは如何

英人は清と通商以來頻に印度より阿片を輸入し大に害毒を流す是に於て清は宣宗の時に兩廣の總督林則徐なるもの英商の阿片二萬餘箱を沒收し是を燒棄したるを以て英國大に怒り軍艦十艘を以て清國各所を攻擊せり是所に於て清國は左の件を以て英に和を請ふ

一、償金二千六百萬兩を英に納る、事

二、香港を英領とする事

三、廣東、福州、寧波、廈門、上海、の五港を開く事

洪楊賊の亂とは如何

廣東花縣の人洪秀全なる者文宗の咸豐元年八月同志楊秀清、馮雲山等と兵を起し滿朝に反す是の目的は滿洲政府を覆し新政府を建て以て國民の福利を進んせしものにして國號を太平天國と稱し自ら天王と云ふ是等の徒巧に人民を煽動し勢最も猖獗にして曾國藩、左宗棠、劉銘傳、李鴻章等の名將前後力を致せしも利あらず穆宗位に卽くに及び英、佛、米の三國に救援を乞ひ共に力を合し是を平定せり此亂咸豐元年に起り穆宗の同治四年八月に至て始めて平きぬ其間凡十六年に及べり。

英佛聯合軍が清を攻擊せし始末を記せ

文宗の咸豐年間に廣東の領事館を燒く英人怒りて兵を發す清政府拒れに應

の功を積みて遂に三柱の孫呉世瑠を誅し其他を降して藩鎮の憂を除けり。

モーガル帝國とは何ぞや

我が紀元二千百六十二年頃帖木兒の裔バーベルは阿富汗より起り當時印度に於て路堤王家覩貝

碌家を滅ぼして羅特布覩種族と爭ひ國勢大に衰へたるを以てバーベル遂に印度に入りて古里を

陷れ有名なるモーガル帝國を建設せり

暹羅開國の次第を述べよ

暹羅は第十七世紀の初ソラサロノソンタム王位に卽くに及び日本の山田長政を用ゐ其國亂を平

げ其後希臘人コンスタンチンの勸めに依り佛兵を來駐せしめしを以て國人服せざりしが鄭昭と

云ふ者遂に恢復して都を盤谷に奠め昭の斃るゝに及び其弟華是に代り貢を清に納れて其封冊を

受け爾來今王に至る迄次第に其國力を增進し歐米諸國の文化を納るゝに力めたりき。

鴉片戰爭とは如何

英人は清と通商以來頻に印度より阿片を輸入し大に害毒を流す是に於て清は宣宗の時に兩廣の

總督林則徐なるもの英商の阿片二萬餘箱を沒收し是を燒棄したるを以て英國大に怒り軍艦十艘

を以て清國各所を攻擊せり是所に於て清國は左の件を以て英に和を調ふ

一、償金二千六百萬兩を英に納るゝ事

二、香港を英領となす事

三、廣東、福州、寧波、厦門、上海、の五港を開く事

長髮賊の亂とは如何

廣東花縣の人洪秀全なる者文宗の咸豐元年八月同志楊秀清、馮雲山等と兵を起し清朝に反す是

の目的は滿州政府を覆し新政府を建て以て國民の福利を進んとせしものにして國號を太平天國

と稱し自ら天王と云ふ是等の徒巧に人民を煽動し勢最も猖獗にして曾國藩、左宗棠、劉銘傳、

李鴻章等の名將前後力を致せしも利あらず穆宗位に卽くに及び英、佛、米の三國に救援を乞ひ

共に力を合し是を平定せり此亂咸豐元年に起り穆宗の同治四年八月に至て始めて平きぬ其間凡

十六年に及べり。

英佛聯合軍が清を攻擊せし始末を記せ

文宗の咸豐年間に廣東の官吏恣まゝに英國の領事館を燒く英人怒りて兵を發す清政府怖れて償

金を出して平和の局を結ぶ又々廣東人英商の船を掠む時に佛國の宣教師又清人に殺されければ香港知事パーリス佛國と聯合し共に廣東を攻め進んで天津に至る清朝是を聞き八百萬兩を出して局を天津に結ぶ已にして清人又英佛の使節を砲擊せしかば英佛益々怒り遂に北京を陷れ文宗を熱河に走らせ掠を縱にす露國公使イグナチエフ其間に斡旋して英に償金千二百萬兩佛に六百萬兩を與へ耶蘇教の弘布を許し牛莊、登州、潮州、台灣、瓊州、九江、漢口を開かむ事を約せしむ。

愛琿條約とは何ぞ

皇紀二千五百十四年英佛同盟軍露國に抗じクリミヤの役起るに及び英佛二國の軍艦共にオコツク海に闖入せしかば露國ムヲイヨーフは益々黑龍江を收むるの必要を感じ帝に申請して黑龍江の運糧を試み且つ清國に迫りて境界改定の議を開けり時に清國は內に長髮賊の憂あり外には英佛の紛議あり北方を顧るに遑あらざりしかば一に露國に任じ悉く黑龍江以北の地を割き與へ黑龍、松花、烏蘇里三江の自由行通權を與へたり是を愛琿條約と云ふ時に皇紀二千五百十八年なりき。

チルチンスクの條約を記せ

十七世紀の中頃露土亞にはボヤルコフ及びハバロープの二人出で、西伯利亞の東南部を經營せり卽ちボヤルコフはスタノボイ山脈を越へてセナ河を下り河口より黑龍江を探險してオコツク海に至りて還りハバロープはシルカ河を下りて黑龍江に出で江岸の土族を拂つて烏蘇里江邊に至り更に還つて城をアルバヂンに築けり時に清は世祖の世にして未だ力を外に分つこと能はざりしが既にして康熙帝の立つに至り哥薩克人の南侵益甚しかりしかば帝は愛琿城を築きて是に備へ且つ使を露廷に遣はして哥薩克人の南下を止めしめたり然るにアルバヂンの露人は尙ほ依然として其城を保持したりしかば帝は兵を出して是を拔き主將トブルジンをチルチンスクに逐はしめたり然れどもトブルジンは忽ち援兵を得て再びアルバヂンに來り帝も亦兵を發して是を圍ましめしが既にして露帝ピーター一世はゴローヂンを派して和を讓せしむるに至り帝は內大臣索額圖を遣はして是とチルチンスクに會して平和の條約を結ばしめ悉く露人の侵地を恢復してアルグン河を以て境界となせり時に西紀一六八九年九月にして我が紀元二三四九年なりき。

克恰圖條約とは何ぞ

西紀千七百二拾七年露帝カダリン使を北京に通じてヲグダンスキーを公使とし後貝加爾（バイカル）、布位（ブーラ）河上に清使蒙古郡王策凌等と會同し蒙古の盟を讀せしむ並に通商條約を結ばんと云ふ是を恰克圖條約とす左の如し

一、逃亡人は露清兩國共に是れを搜索して還附する事、二、恰克圖に貿易場を開設する事、三、アルグニー河を界とし西はポモシヤナイ嶺を以て界し塢特河地方を以て中立となすこと、四、從來通商規定を改め北京に教會堂の設立をゆるす事此條約成るの後露國は專ら恰克圖に於て貿易を營む事となり清國に屬する市場を賣買城と稱し以來兩國の貿易並に國交は漸く其端緒を開くに至れり時に我が二千三百八十七年なりき。

伊犂事件とは何ぞ

清國河西の地に東干族あり清國の內外に事あるに乘じ兵を甘肅に舉ぐ近傍の回教徒是に應せり時に喀什噶爾人ヤッブ喀什噶爾を陷れ東干族を降し我二千五百三十年天山南路を領有せり是に於て陝甘總督左宗棠は東干族を破り進みて喀什噶爾を討せり伊犂の回教徒亦叛して喀什噶爾に應せり露國は其邊境を靖ずと稱し我二千五百三十一年伊犂教徒を討して伊犂を占領せり清將左宗棠が我二千五百三十七年全く喀什噶爾を討平するに及び清の光緒帝は崇厚を大使とし露國に撤兵を要求せしむ崇厚終にリヴヂヤ假條約を結び償銀五百萬留及びテリス河上流の地を露國に讓らんとせしが清廷是を破棄し更に我二千五百四十年曾國藩を大使として露國に使し露國は伊犂を返しホルゴース河西及び九百萬留の償金を得る事を協定したりき。

印度が英領となりし次第を記せ

英人が葡、蘭兩國人を排してマドラスに根據を定めたるは我が二千二百九十九年なるが是より彼等は商區の擴張に盡力し二千二百六十四年來印度に根據を固めたる佛蘭土人と衝突して佛將ヂユープレーを破れり時に印度は莫臥兒衰へて諸王割據の景勢となり諸王或は佛を援け英に抗したるが如し英は其後全く佛の勢力を挫きてベンガル副王の廢立を行ひ因りてカルカッタ地方を得て益々其根を固め爾來頻に印度の內亂に干係して其財權を奪ひアーメッドの侵入後マハラッタ同盟の南北に分れて攻爭せるを利し先づ南黨を助けて北黨を仆し次で南黨が英の勢威を挫かむとせるを討ちてモーガル帝國を保護の下に置き後幾もなく其全土を席卷せりペルガル人則ち是を恢復せむとせども成らずモーガル帝は遂に我二千五百十七年を以て緬甸に放逐せられ同

西紀千七百二拾七年露帝カダリン使を北京に通じてヲクタンスキーを公使とし後貝加爾（サバイカル）、布位（ブーラ）河上に清使蒙古郡王策凌等と會同し蒙古の彊を畫せしむ並に通商條約を結ばんと云ふ是を恰克圖條約とす左の如し

一、逃亡人は露清兩國共に是れを搜索して還附する事、二、恰克圖に貿易場を開設する事、三、アルグニー河を界とし西はポモシャナイ嶺を以て界し塢特河地方を以て中立となすこと、四、從來通商規定を改め北京に教會堂の設立をゆるす事此條約成るの後露國は專ら恰克圖に於て貿易を營む事となり清國に屬する市場を賣買城と稱し以來兩國の貿易並に國交は漸く其端緒を開くに至れり時に我が二千三百八十七年なりき。

伊犂事件とは何ぞ

清國河西の地に東干族あり清國の内外に事あるに乘じ兵を甘肅に擧ぐ近傍の回教徒是に應せり時に喀什噶爾人ヤッブ喀什噶爾を陷れ東干族を降し我二千五百三十年天山南路を領有せり是に於て陝甘總督左宗棠は東干族を破り進みて喀什噶爾を討せり伊犂の回教徒亦叛して喀什噶爾に應せり露國は其邊境を蹂すと稱し我二千五百三十一年伊犂教徒を討して伊犂を占領せり清將左宗棠が我二千五百三十七年全く喀什噶爾を討平するに及び清の光緒帝は崇厚を大使とし露國に撤兵を要求せしむ崇厚終にリヴァヂア假條約を結び償銀五百萬留及びテリス河上流の地を露國に讓らんとせしが清廷是を破棄し更に我二千五百四十年曾國藩を大使として露國に使し露國は伊犂を返しホルゴース河西及び九百萬留の償金を得る事を協定したりき。

印度が英領となりし次第を記せ

英人が葡、蘭兩國人を排してマドラスに根據を定めたるは我が二千二百九十九年なるが是より彼等は商區の擴張に盡力し二千二百六十四年來印度に根據を固めたる佛蘭土人と衝突して佛將ヂユープレーを破れり時に印度は莫臥兒衰へて諸王割據の景勢となり諸王或は佛を援け英に抗したるが如し英は其後全く佛の勢力を挫きてベンガル副王の廢立を行ひ因りてカルカッタ地方を得て益々其根を固め爾來頻に印度の内亂に干係して其財權を奪ひアーメッドの侵入後マハラッタ同盟の南北に分れて攻爭せるを利し先づ南黨を助けて北黨を仆し次で南黨が英の勢威を挫かむとせるを討ちてモーガル帝國を保護の下に置き後幾もなく其全土を席卷せりペルガル人則ち是を恢復せむとせしも成らずモーガル帝は遂に我二千五百十七年を以て緬甸に放逐せられ同

三十七年英國女皇ビクトリア印度女皇の尊號を得たる等なり。

事大黨、獨立黨とは何の意ぞ

朝鮮が諸外國と交際するに及び朝臣の間に事大黨と獨立黨の二派を生じ相排擠す事大黨とは專ら清國に依賴して其外藩たらんとし閔泳翊、閔泳駿等其首領たり獨立黨とは我日本に賴り獨立の躰面を全くせんとする者にして朴泳孝、金玉均等其首領たり。

天津條約を記せ

事大黨の諸臣清將袁世凱と相結托して勢力盛也獨立黨の領袖金玉均等は憤り遂に是が暗殺を企て國王を景祐宮に奉じ日本公使の保護を請へり故を以て竹添公使は兵を卒ひて行て王宮を守りたりしが清兵は事大黨に荷擔して來りて是を襲ひ遂に日本公使館も燒く是に於て日本は井上馨を朝鮮に遣はして謝罪金十三萬圓を納めしめ更に伊藤博文を清國に遣はして善後の策を議せしめたり博文乃ち李鴻章と天津に會見して兩國互に朝鮮の兵を撤し爾後出兵の必要ある時は必ず相通告すべき事を約せり時に明治十九年なり是を天津條約と云ふ。

日清の役源因及び結果を問ふ

我が二千五百五十四年朝鮮に東學黨の亂起る東學黨とは儒佛道の三教を混和折衷して別に一教法を案出して名けたる一種の迷信を抱く者の結合なり諸政府を怨み居る者是れと共に起り勢甚だ猖獗なり是に於て我國は朝鮮在留の人民を保護する爲め兵を出し且つ清國と共に朝鮮の內政を改革して亂源を塞がんとし此事を清國に勸告す清國は天津條約を破り朝鮮の外藩たるを主張し我が國の撤兵を請求せり事是所に至るを以て日本は清國に宣戰を公布するに至れり是を源因とす。

結果明治廿八年三月廿一日和成る是を馬關條約と云ふ其個條左の如し

一、清國が朝鮮の獨立を認むる事

二、清國が遼東半島、台灣、澎湖島を割く事

三、清國が軍資の償金二億兩を出す事

四、清國が償金支拂をなす迄は威海衛の占領を日本軍に許す事

等なりしが後露、獨、佛の勸告に由り遼東は還附し其報として三千萬兩を受く。

北清事件の源因を問ふ

日清戰爭後間もなく義和團と稱する一種頑迷の暴民北京附近に蜂起し列國公使館を包圍し各國民居留者に危害を加ふ

（をはり）

跋

東洋の各國、上下古今を通じて五千歲、國起りて又亡び、人生れて復去る、其間の跡を繹ねて掌上に指す者是れ歷史の書に非ずや。然も從來の支那の史は文明史的のもの皆無にして唯其當世の代表者ともなるべき所謂英雄豪傑の個人的の傳記に過きず。故に散漫にして統一なく、浩瀚にして明晰を欠き讀む者をして开が大勢の趨く所の終始本末を捕捉するに苦ましむ。

熟々今日諸中學校に於て東洋史を學生に授くるを見るに如上の傳記的、稗史的の史書に因りて而して短日月の間に於て开を講ぜり。則ち浩瀚不完全なる史書に因り短日月の間に是が研究を遂ぐ。夫れ然り、然るが故に教師は勞して功なく生徒は勉めて益なし。嗚呼復誤らずや。

我友德重鴻城君大に見る所あり。因て學課の餘暇諸書を涉獵し又自ら工夫す

る所あり、以て此書を成す。余繙きて是を觀るに上下五千歳、興廢存亡の跡、純ら其因を揣り果を摩し、誤らず、遺らず。所謂簡單にして其意を盡せり。憶ふに此問答書世に出づるの曉は世の學生諸子は之に依りて大に益する所あるべし。

明治三十六年六月七日

井上桐雲識

明治三十六年八月廿五日印刷
明治三十六年八月廿六日發行

岡山市上石井二百七十五番地森方
編輯兼發行人　德重正人

岡山市七軒町二十二番地
印刷者　佐藤性純

岡山市東中山下四十番地
印刷所　中國民報社

東洋歴史問答　徳重鴻城

宮殿武具装束図

国立国会図書館

特
9

003406-000-4

特20-920

東洋歴史問答

徳重　鴻城／編

M36

ACC-1931